居住者評価からみる生活共有空間についての考察

A Study on Common Space for Sharing Daily Life through Residents' Evaluation

10223003　　齊藤智子
主査　篠原聡子　助教授
副査　後藤　久　　教授
副査　定行まり子助教授

共用空間，個室，共同生活，シェア，単身者
common space , private room , collective life , share , single life

第1章　研究の背景と目的

研究の背景と目的

近年の家族形態の変化により、住居の基本単位は細分化を続け、高齢化や晩婚化、離婚率の増加などを背景に単身世帯の割合が増加が顕著にみられている。また、家族形態の変化により世帯構成も変容し都市生活者のライフスタイルや生活観が多様化しているという現状がみられる。

そのような背景の中で、「単身居住」はこれまでの、結婚や新しい世帯を構えるまでの一時的な家族類型や、過渡期のものではなく、ひとつの確立した「居住スタイル」として捉えるべきであると考えられている1)。

これまでの単身者の生活は、主にアパートやワンルームマンションの個室に置かれることが普通であった。設備の整った閉ざされた個室の中でひとりで生活を送る単身者が多い現状では地域や社会、人とのコミュニケーションが希薄となり、生活の外で作られたコミュニティに寄生し生活をすることが多くなる。

このような現状の中で、都市に生活する単身者に行ったアンケート2)では生活の中に人との関わりを求めているという現状が推測された。(図1)また、共有形態では、自分の生活は確保することを前提としているものの一部の生活において人との関わりを求めているという意見が多くみられた(図2)。これらの結果から、単身者は生活空間の共有にどのような可能性を期待し、そのためにどのような空間が必要とされているのか、さらに掘り下げて調査していく必要性が考えられた。

そこで本論ではこのような調査結果を踏まえ実際に生活を共有している単身者の事例における居住者の意識、生活を把握する事によりその実態を明らかにし、生活の共有における住空間に関わる生活共有の可能性を抽出する事を目的としている。

1)橋本都子，市川夏子，篠原聡子：都市の単身居住者における「住居」の意味についての一考察，日本建築学会計画系梗概集，P.5659，2001年.
2)齊藤智子：INDIVI marge，日本女子大学卒業制作，2002年

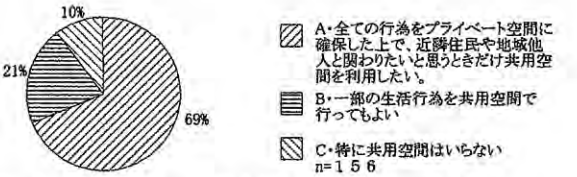


図1　あなたは生活空間を他人と共有したいと思いますか？

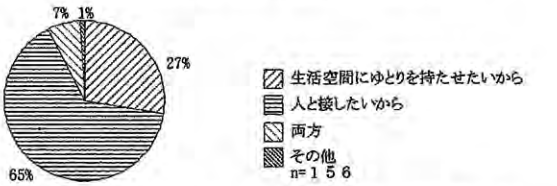
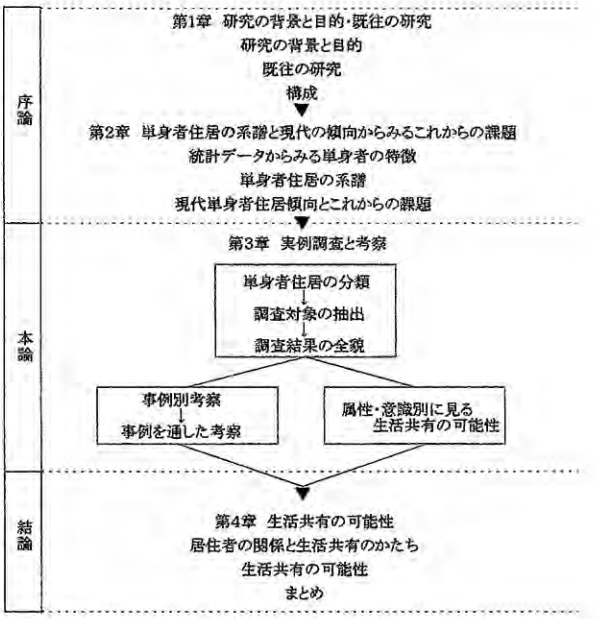


図2　共用空間を持つということは、これによって生活空間にゆとりが持てるということ、一人暮らしという孤独から解放されることの2点の利点があります。
そこで、もしあなたが共用空間を持つとしたら、次のどれにあたりますか？

論文の構成

表1　論文の構成



本研究論文は4章で構成されている(表1)。一章においては本研究の目的や枠組みを示し、二章ではこれまでの事例と現代の事例を考察することにより本研究の方向性を示し、以上を序論とする。

三章では生活の共有における可能性を空間的に分類、調査対象を抽出し、実際に生活を共有している単身者における生活の実態、特に生活を共有する空間(共用空間)の実状、実際の居住者の生活がどこで行われ、共用空間がどの様に利用されているのか、居住者同士がどのような関わりを持っているのかを調査し把握する。また、実例を比較考察することにより、共用空間の構成による生活の特徴、居住者の意識の相違を考察すると同時に、居住者の属性や意識による共用形態の相違を捉える。

四章では実例の考察から得られた結果を基に、生活の共有をかたち付けている要因を挙げ、これらに対する居住者の評価、需要を考察することにより、生活の共有の可能性を把握する。

第2章　単身者住居の系譜と現代の傾向からみるこれからの課題

2-1　統計データにみる単身者の特徴

未婚化、晩婚化の影響や、高齢者数の増加により夫婦のみ世帯や単独世帯が増加し、小世帯化がさらに進行している。70年では夫婦のみ世帯と単独世帯の合計が30%であったのが2000年には47%を占めるまでになっている。このような世帯人員の減少は、今後も続くと見込まれ、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、高齢者単独世帯の大幅な増加等の要因により、2020年には大半の都道府県において、単独世帯が最大の家族類型割合を占めると見込まれている3)

また、東京都住宅白書では、東京都の世帯タイプ別の構成比において、単身居住者、特に若年単身者、中年単身者が特に多いということを指摘している4)。

2-2　単身者向け住居の系譜

歴史的にみると、単身者住居について、活発な試みがなされた時代がある。特に、近隣との接触が活発であった時代には、ひとりでの生活のためにコミュニティが失われていくことを懸念して、あらゆる工夫がなされた単身住居が多く試みられた。特に、御茶ノ水文化アパートや、同潤会による試みには、単身者住宅への工夫が多くみられる。

戦後は、木造賃貸アパートが普及し、単身者の生活を支えたが、1968年黒沢隆による個室群住居の発表、1972年黒川紀章による中銀カプセルタワーの発表と、近年では個室に着目した単身者の生活が取上げられ、注目を浴びた。

現代のワンルーム住居の誕生としては、サラリーマン向けの投資マンションとして開発されたメゾン・ド・早稲田がが始まりであると考えられている。5)

2-3　現代の単身者住宅

単身者の増加、単身者のライフスタイルの多様化が言われ始めた現代、単身者住居にも注目が集まり、多くの新しい住まいが提案され始めている。

ひとつには、空間の自由性を重視する単身者の登場による、提案型マンションやコーポラティブハウジングが挙げられる。また、もうひとつの流れとしては安心感や経済性、将来性を考慮しての、人との関わりを重視したコレクティブハウジング、ルームシェア、コーポラティブでの生活選択が挙げられる。これらの新しい流れに対し、新しいライフスタイルの提案、新しい住まいのかたちの提案が求められているといえる。

まとめと問題提起

系譜からみる、単身者住居への活発な試みでは、多様な共用空間を持つ単身者住居が挙げられ、その中での活発な生活が多くの文献にも残されている。このような歴史を汲み、再び単身者の住まいに注目を浴び始めた現代、新しい住まいの提案がなされるべきであると考えられる。このような現状の中で、実際に新しい住まい方を実現している単身者の実例を調査することで、新しい単身者の住まいに何が必要とされているのかを考察したい。

3)総務庁:国民生活白書　平成13年版
　～家族の暮らしと構造改革～
4)東京都住宅局:東京都住宅白書
　「東京居住の姿をさぐる」(平成12年度)
5)篠原聡子, 大橋寿美子,
　小泉雅生＋ライフスタイル研究会編著:
　変わる家族変わる住まい, 彰国社, 2002年8月

第3章　実例調査と考察

3-1　単身者住居の分類

共に住まうための生活空間には生活の共有形態により多様な形態が可能性として考えられる。そこで、本研究では調査にあたり、これらを個室機能と共用機能の違いにより「生活共有単身者の住まい類型」として分類した(表1)。

①分類 1　個室機能のレベルによる分類

専用の個室に備えられている機能の質の違いによりあり得る例を大きく4段階に分類した。

個室に備えられる機能が少なければ少ないほど不足している機能が必然的に個室からはみ出し共用空間、都市の中で補われる事になる。

ここで、個室の機能として日常生活内で必需である洗面(水)、トイレ、浴室、キッチンを挙げこれらの機能の有無により個室を4段階にレベル分けする。

個室機能レベルA	洗面・トイレ・バス・キッチンを個室に備えているもの
個室機能レベルB	洗面・トイレ・バス・キッチンの一部を個室に備えていないもの
個室機能レベルC	個室にこれらの機能を持たないもの
個室機能レベルD	個室がないもの

②分類 2　共用空間形態による分類

個室に存在しない機能は必然的に共用空間にはみ出し、皆で共用することになる。そこで、皆が使用する共用空間がどの様な形態で存在するのかを、特に居住者の生活に違いがみられると予想される集い空間（＋α空間）の有無により分類する。

共用空間に補完機能＋α（集い・多目的）空間を持つ
　共用空間に居住者が集まれるような集い空間や、多目的に使用できる空間を持ち合わせるもの

共用空間に個室機能を補完する機能＋動線のみ
　共用空間が動線と個室を補完する機能のみで成り立ち余剰空間（＋α空間）を持たないもの

3-2　調査対象の抽出と調査概要

前項の分類から、各々の類型において調査可能な物件を抽出した結果、以下の物件(表2・図9)を調査対象とした。本研究では、生活を共有している例を取り上げるため、調査対象は個室レベルB～Dの事例となる。

調査対象	調査方法
事例a　社員寮	A　アンケート 基本的な事項
事例b　木賃共同アパート	B　詳細アンケート アンケートにヒアリング内容を加えた詳細事項
事例c　ミングル	
事例d　松陰コモンズ	
事例e　早稲田ルームシェア	C　ヒアリング 詳細とアンケートの補足

調査内容

1. 基本事項
2. 生活行為別にみる生活共用の可能性
3. 物の所有と共用
4. 居住者同士の関係性・交流について
5. 建物の構成について
6. これからの展望について

表3　調査対象と調査内容

	アンケート／全居住者	詳細アンケート	ヒアリング
	住居選択理由 生活行為・物の場所 他の居住者との交流 生活共有への期待 これからの展望	アンケート調査に加え 空間の気配の感じ方 1日の生活行為と場所 他の居住者との交流時間 等	
事例a　社員寮	5／100名	6名	1名
事例b　木賃共同アパート	1／14名	1名	1名
事例c　ミングル	31名	2名	2名
事例d　松陰コモンズ	6／7名	6名	1名
事例e　早稲田ルームシェア	4／4名	4名	4名

3-3　調査結果の全貌

被験者の属性

男女比はほぼ半数となり、年齢分布は主に20代に偏った。他の居住者との関係は、友人、他人、兄弟がほぼ同じ比率となり、社会人が占める割合がやや多くなっている。住居選択理由は経済的理由と、安心感・寂しさを理由にした人が半数ずつほぼ大半を占め、他に、共同生活という暮らし方に興味を持ってという人が少しみられた。

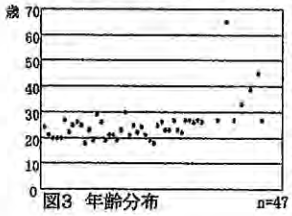


図3　年齢分布

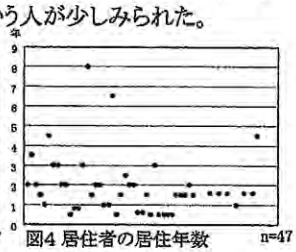


図4 居住者の居住年数

図5　居住者の男女比

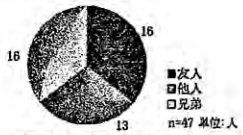


図6 他の居住者との関係

図7 居住者の職業

図8　住居選択理由

表2　単身者住居の分類と調査対象物件の抽出

	個室機能	共用機能：個室機能を補完する機能＋動線のみ	共用機能：補完機能＋α（集い・多目的）空間を持つ
個室レベルA	洗面・トイレ 浴室・キッチン を個室に全て備えている	一般ワンルームマンション	SQUARES（＋佇み中庭） アパートメント博（＋カフェ） お茶ノ水文化アパート（＋社交室・食堂）
個室レベルB	洗面・トイレ 浴室・キッチン の一部が個室備えられていない	一般ホテル	共同長屋 公団アクティ汐留（＋浴室・リビング） 事例 a　社員寮（＋集い）
個室レベルC	洗面・トイレ 浴室・キッチン を全て個室に備えてない	事例 b　木賃共同アパート	事例 c　ミングル 朝川ビル（＋公衆浴場） 鎌田ハウス（＋公衆浴場） 公団河田町コンフォガーデン（＋リビング） 公団東雲キャナルコート（＋リビング） 大塚女子アパート（＋集い） 事例 d　松陰コモンズ（＋集い）
個室レベルD	個室なし		事例 e　ルームシェア

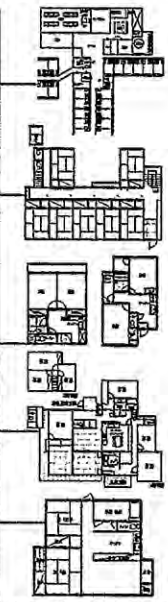


図9　調査対象物件平面

全体の調査結果

生活行為の場所(図10・11)

生活行為の場所においては、現状と希望を聞くことによりその実態と要望、需要が明らかとなった。主にFactor2※)の食べる・飲む行為において、共用空間で行いたいという結果がみられ、洗濯機能と、招く行為においても共用空間での行為に可能性が見られる結果となった。

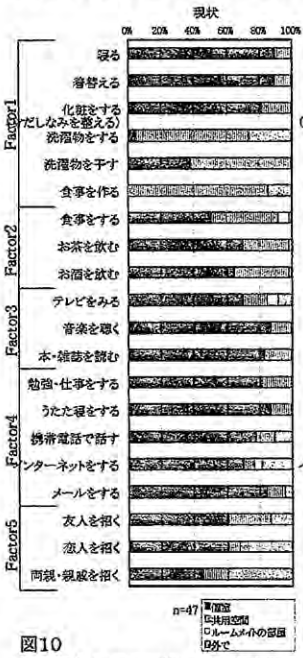


図10
生活行為を何処で行っていますか？

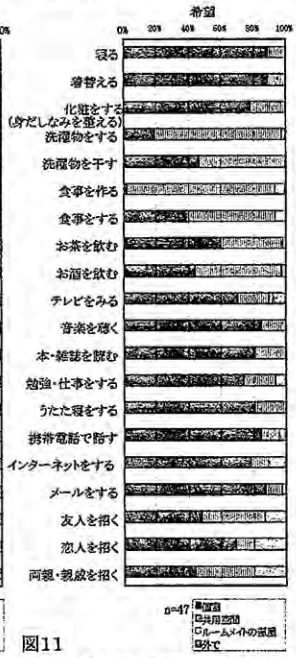


図11
生活行為を何処で行いたいですか？

物の場所(図12)

共用空間がどの様に使用されているかの指標として物の共用空間へのはみ出しを調査した。結果からは、主にFactor2に関する物は共用空間、私物は個室という回答が基本となり、テレビにおいては、個室と共用空間の両方に置かれているという回答がやや多くみられた。

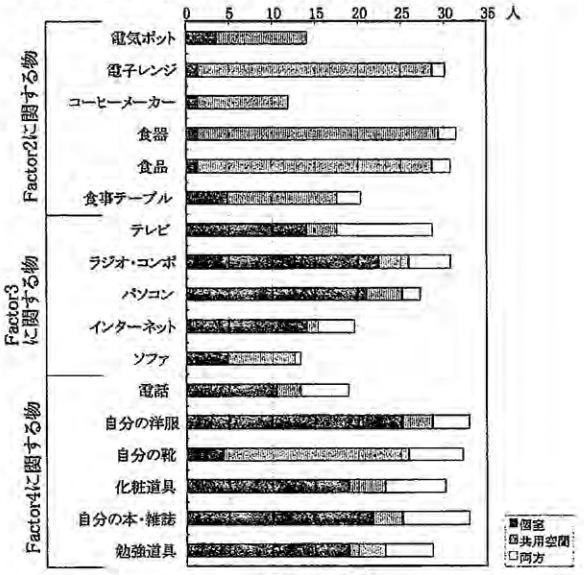


図12 物の場所

他の居住者との交流(図13)

他の居住者の生活の中での交流度を得るために、交流が見込まれる行為においての交流意識を調査した。主に、食べる行為・飲む行為においては交流に積極的であり、個人行為、人を招く行為においては交流に否定的な意見が多く見られた。

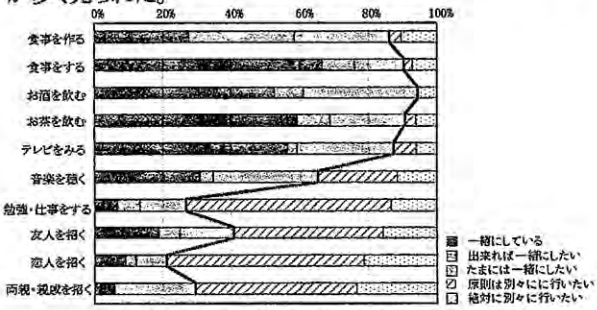


図13 他の居住者と共に行いたい行為　n=47 重複回答

居住者との関係(図14)

他の居住者との関係については、干渉しないがいざという時に助け合う関係を求めている人が半数となった。

図14 他の居住者とはどの様な関係を望みますか？

これからの展望について(図15・16)

このような生活を体験した上でのこれからの展望に付いては、一人暮らしをしたくない人が半数を占め、このまま生活の共有を続けたいという人が多く、生活の共有への期待がみられた。

図15 一人暮らしたいですか？

図16 ずっと単身だったら
どのような住まい方を選びますか？

共用しても良い機能(図17)

建物内で他の人と共用しても良いという機能としては、個室に簡単な浴室を確保した上での大浴場や、ラウンジ、カフェが多く挙げられ、洗濯機に関しては、自宅になくても、皆で共用のランドリールームがあれば良いという回答が多く見られた。これらから、このような機能に共用の可能性があることがうかがえる結果となった。

図17 共用しても良い機能

※)調査対象とした生活行為において傾向が類似している行為を、生活を把握するための基本的要素としての5つのFactorとして大分類した。本論分では、生活における基本行為をFactor1、食べる飲む事に関する行為をFactor2、くつろぐ行為をFactor3、個人の行為をFactor4、人を招く行為をFactor5として考察する。

全体アンケート結果からみる生活共有の可能性

全体アンケート結果からみる居住者の展望からは、今後一人暮らしをしたいかという問いに対し、半数以上の人がしたくないという意見を述べ、また、ずっと単身だと仮定した場合は、2人や3人以上でシェアをしたいという人が1／3以上という結果になった。このように、実際の生活の共有という現状に満足し、これからもこのような住まい方に期待を持っている人が多くいるということに、生活の共有という住まいかたに可能性がみられる。 住居選択理由から見ると、安心感、寂しさや、住まい方からこのような生活共有を希望している人が多数で、生活共有への人との関わりが期待されていることが分かる。他の居住者と共に行いたい行為においても、Factor2では交流に肯定的な意見が多く、これらの食べる・飲む行為において人との関わりが期待され、共有に可能性がある事がわかった。

また、生活行為の場所では、主にFactor2とFactor5において共有空間に期待がもたれ、このような機能を持ち合わせる共用空間が必要とされている事が分かる。

3-4 生活共有単身者の事例別考察

調査対象を事例別にみると、生活の共有実態やその要因が形態別に異なっている事が浮かび上がってくる。本項では、各々の事例において、生活の実態、共有のあり方に注目し、考察する。

ヒアリング・アンケート対象者属性：居住者番号・性別・年齢・職業・居住年数・家賃（光熱費）・住居選択理由・居住者との関係の順

居住者の個室
居住者のプライベートコモンスペース
居住者のパブリックコモンスペース
居住者の動線

事例a 社員寮

ヒアリング・アンケート対象者：①男性・26歳・会社員・1年6ヶ月・12000円・経済的理由②同上③同上④男性・27歳・以下同上⑤女性・27歳以下同上

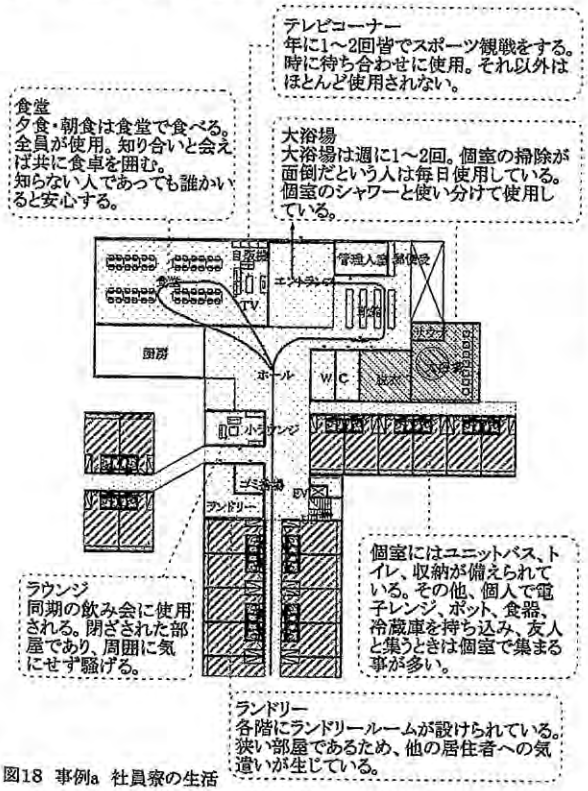


図18 事例a 社員寮の生活

事例b 木賃共同アパート

ヒアリング・アンケート対象者：①男性・27歳・学生・4年6ヶ月・43000円・経済的理由・家事の軽減

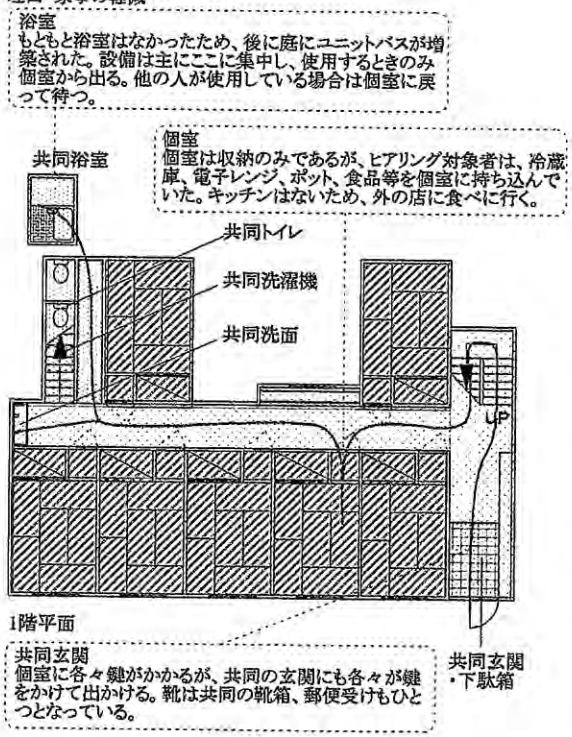
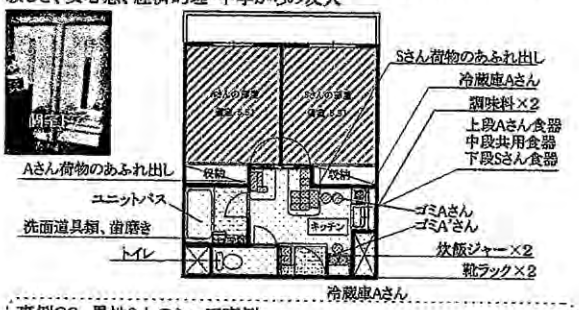


図19 事例b 木賃共同アパートの生活

事例c ミングル

事例C1 女性2人のシェア事例
安心感を得るために、物は全て個人所有である前提で共同生活を始めている。入居4.5年目で、個人の生活が前提であるが、たまに各々の部屋を招きあい、交流している。

ヒアリング・アンケート対象者：①女性・27歳・会社員・4年6ヶ月・60500円・寂しさ、安心感、経済的理・中学からの友人



事例C2 男性2人のシェア事例
シェアに経済的な削減を期待しているため、物、生活費は全て共有して効率性を図っている。共同生活に憧れ、たまにはルームメイトと交流したいと望んでいるが、時間のずれもあり、ほとんど交流は無い。

ヒアリング・アンケート対象者：①男性・26歳・会社員・6ヶ月・60500円・経済的理・会社の同期

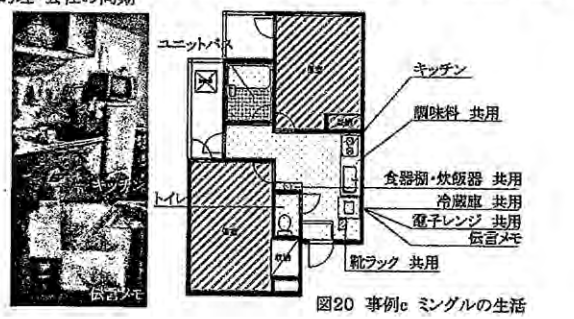
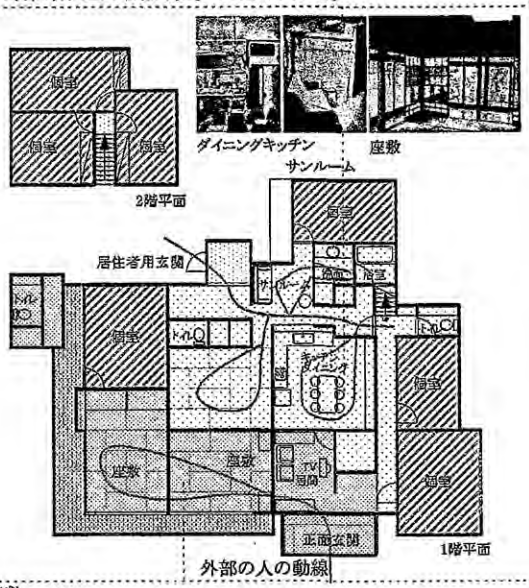


図20 事例c ミングルの生活

事例d 松陰コモンズ

ヒアリング・アンケート対象者：①女性・65歳・テレビプロデューサー・1年7ヶ月・58000円・住まい方に興味②女性・45歳・イラストレーター・1年5ヶ月以下同上③女性・39歳・無職・1年8ヶ月・58000円・家への魅力④男性・33歳・会社員・1年・61000円・経済的理由⑤男性・27歳会社員1年8ヶ月・44000円・住まい方に興味⑥女性・27歳会社員・1年8ヶ月・49000円・住まい方に興味

ダイニングキッチン
食事の時間が重なると、皆でテーブルを囲むこともある。そのまま飲み会に発展することもあり、そこに帰ってきた人が加わる。ここを中心として居住者同士の自然な交流が生まれている。



座敷
友人や親戚を招くときや、気分転換として読書や、仕事、転寝に使用される。地域や外部の組織に貸し出し、イベント等が行われることもある。

図21 事例d 松陰コモンズの生活

事例e 早稲田ルームシェア

ヒアリング・アンケート対象者：①男性・23歳・学生・6ヶ月・20000円（以下家賃同様）・経済的理由②同上③男性・27歳・以下同上④男性・22歳・以下同上

キッチン　作業部屋　作業部屋からキッチン

この2部屋が主に寝室空間となっているが、個人の行為やくつろぎにも使用されている。個室はないが、主に各々の布団の周辺に個人の物が置かれ、個人の行為が広がっていることがわかる。

食事やくつろぎはほとんどこの空間で行われる。寝室空間からはひと続きの空間となっているので、ひとりの行為に皆が自然と加わったりという交流が起こっている。

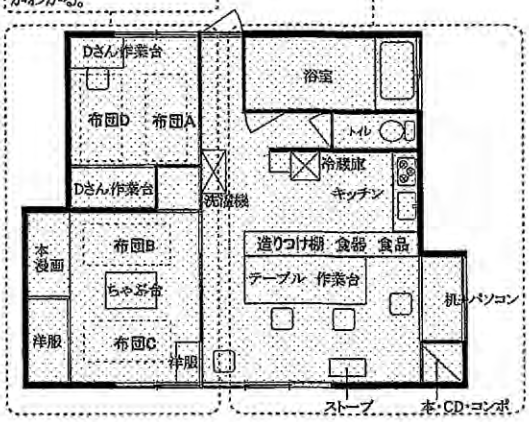


図22 事例e 早稲田ルームシェアの生活

3-5 共有形態別比較考察

生活行為の場所（表4）

生活行為の場所は事例別に偏りが観られることが分かる。比較的社員寮、木賃共同アパート、ミングルではその傾向が似ており、特定の行為を共用空間で行い、ほとんどの行為を個室で行うという傾向がみられた。一方松陰コモンズでは、行為が分散され、多くの行為を共用空間で行っていると共に、多様な行為について自分の個室と共用空間を使い分けているのが特徴的である。また、早稲田のルームシェアでは、個室がないため全ての行為を共用空間で行うこととなり、その分住居内で行わない行為が多くなっているのが特徴となっている。

また、＋α（集い）空間を持つ社員寮と松陰コモンズでは自分の個室と共用空間を使い分けている行為が多く見られる。＋α空間があるとき、そこにはみ出る行為としては、お茶を飲む、お酒を飲む、テレビを見る、本・雑誌を読む友人・両親を招く行為が主に挙げられる。

他の居住者と共に行う行為（表5）

全体を通してみると多くの事例で、主にFactor2の食べる・飲む行為において行為の共有が今でも行われている事が挙げられる。特に食事とお酒を飲む行為においてては居住者同士今も共に行っている例が多くなっている。

形態別にその可能性をみてみると、個室に機能が多いほど現在共に行っている行為が少なく、個室がない事例では、多くの行為を共にしていることが分かった。社員寮では共に行う行為が限定されているのが特徴となっており松陰コモンズでは、主に食べる・飲む行為に集中しているのが特徴的である。これらは、＋α空間のあり方によるものと思われ、社員寮では行為の特定された室としてのラウンジ、松陰コモンズではキッチンを中心としたダイニングで行為の共有が発生していることから、＋α空間のあり方に重要性が見えてくる。また、ミングルでは、共用空間が狭く人が佇める空間がないが、C1の事例では、居住者同士お互いの部屋を訪ねあって行為を共にすることが頻繁に起こっている。事例C2では、お互いに部屋を訪ねあうことがほとんど無く、共に行っている行為もほとんどない。このように、ミングルでは選択的な交流となっている事がわかった。また、全てが共用空間である早稲田ルームシェアでは多くの行為が共有されると予測されたが、共有に肯定的である行為は、お酒・お茶を飲む行為、音楽を聴く、勉強・仕事を行う、友人を招く行為に集中している。

このように早稲田ルームシェアや松陰コモンズのように、多くの行為を同じ空間で行っている場合でも、他の居住者と共に行っている行為は限定され、個人によって生活の干渉が選択されていることが分かった。

他の居住者と共に過ごす時間（表6）

行為の共有を居住者同士で共に過ごす時間を合わせてみてみると、社員寮では食事やお酒を飲む行為、大浴場

での入浴の時間を平均するとだいたい1日に1時間程度他の居住者と共に過している。木賃アパートでは居住者同士行為も共にせず、空間を共有することも一切ない。ミングルC1では共にテレビを見たりお酒を飲んだりと、好意的に共に過ごす時間が1日に2時間程度、ミングルC2では行為を共にすることもなく、共に過ごすことはほとんどない。比較的行為を共にすることの多い松陰コモンズでは、人によってばらつきがあるのが特徴的であるが、多い人では2時間から4時間、個室のない早稲田のルームシェアでは生活のほとんどを他の居住者と共に過しているが、共に行う行為とあわせてみると共に過す時間が比較的多いこれらの事例では同じ空間で過ごしていてもお互いに干渉し合わずに個人の生活を営んでいるということが多いということがうかがえた。

表4 生活行為の場所　共用空間で生活行為が行われる可能性について

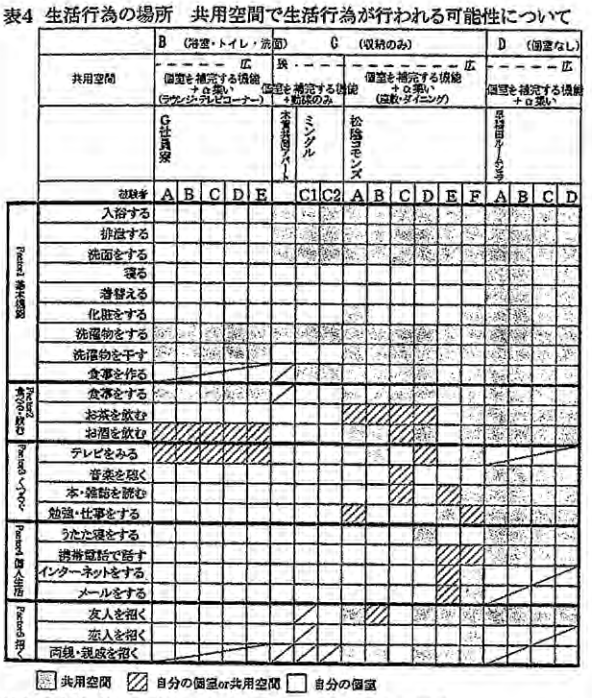


表5 生活行為の共有　共に行われる行為、行いたい行為

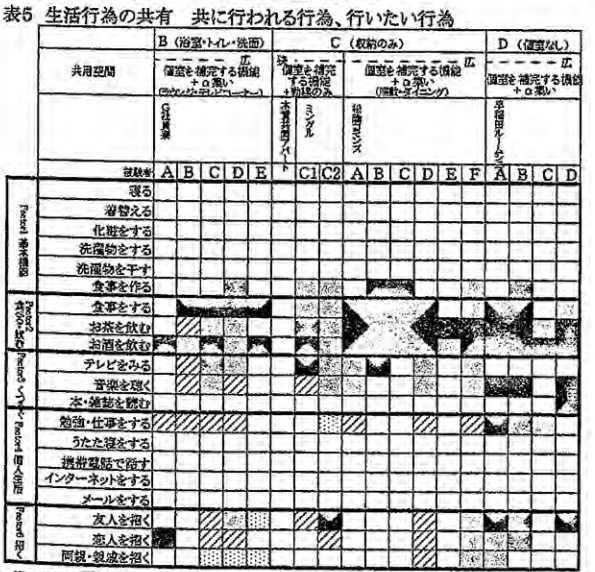
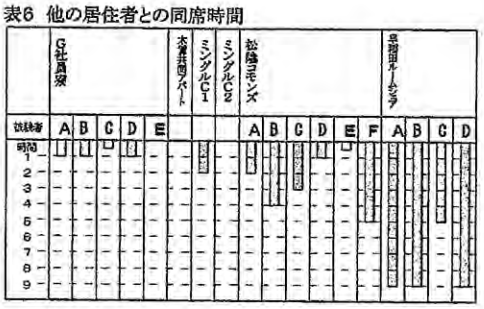


表6 他の居住者との同席時間



3-6 生活共有単身者の属性
意識別にみる生活共有の可能性

[1] 男女別にみる生活共有の可能性

男女の違いに顕著に現れた事項としては、第一に住居選択理由が挙げられる。男性は経済的な理由によりこのような生活共有の住まいを選んでいる人が比較的多く、居住者との人間関係もドライな関係を望んでいる。生活に関しても男性は共用空間の使用に積極的であるが、居住者と共に行う事に関しては女性よりも否定的な意見が多く見られたのが特徴的である。

[2] 住居選択理由別にみる生活共有の可能性

経済的な事を理由にこのような住まいを選択した人では、居住者との間にドライな関係を求めている人が多いが、それでも、食事をする、お酒を飲む行為においては共用空間において他の居住者と共に行うことを希望する傾向がみられた。また、安心感、寂しさを理由として選択した人では、他の居住者と共に行いたい行為に関して、Factor2では肯定的な意見、Factor4・5では否定的な意見という極端な相違がみられ、居住者同士の干渉を制限し、距離を調節しながら生活しているということがわかった。

[3] 居住年数別にみる生活共有の可能性

居住年数を、2年未満、2年以上で分類し、その傾向を見ると、2年以上続いている人の属性としては女性が多く、居住者には何でも話せる深い関係を望んでいる人が多かったのが特徴となっている。生活行為の場所では、2年以上生活を続けている人は個室意識が強く、他の居住者と共に行いたい行為においても、否定的な意見が多くみられた。現在も共に行っている行為が少ないのも特徴的であり個人の生活を重視し、居住者同士距離をおいた関係性が生活の共有を持続させているものと推測される。

[4] 居住者の人間関係評価別にみる生活共有の可能性

居住者同士の人間関係の評価別にみると、ドライな関係を望んでいる人には男性、経済的な理由での入居が多く深い関係を望む人には女性、安心感、寂しさを選択理由をしている人が多かった。両者とも、Factor2の行為においては、共用空間で行為を共にしたいとしている人が多くみられたが、深い関係を求めている人ではFactor3・4の行為においては個室意識が強く、共に行いたい行為においても、行為によって肯定的意見と否定的意見の相違が大きいのが特徴的である。

第4章　生活共有の可能性

4-1　居住者の関係と生活共有のかたち

居住者同士の関わり

生活共有における居住者同士の関わり方については多様な関係性がみえたが、ここで代表的なかかわり方を挙げる。

a.偶発的(自然発生的)交流

共用空間での遭遇や使用が重なったときに交流が発展し、自然に起こる交流。松陰コモンズのキッチン・ダイニングでは、使用が重なったときに皆でおかずを分け合ったりひとりのお酒から晩酌が発展したりと自然な交流が生まれている。また、早稲田ルームシェアも、ひとりがDVDを見始めたところに皆が加わる等自然な交流が発生し、これらは多目的に使用が出来る広い空間で行為が重なることにより生まれているものと推測される。居住者の評価としては、「常に人が居てさびしくない。にぎやかで良い。」ということが挙げられている。

b.誘引的(選択的)交流

社員寮やミングルの事例では、お互い誘い合って交流をしたり、人と関わりたい時のみ交流するという選択的な交流が起こっている。社員寮ではラウンジやテレビコーナーミングルではしゃべりたいときに各々の個室に訪ね、居住者同士の交流が行われている。居住者の評価としては、「プライベートを守りながら、関わりたい時だけ関われる。いざというときは声をかければすぐに着てくれる人がいるという安心感がある。」ということが挙げられる。このように生活の多くを共有していなくても、必要な時に居住者同士が集えるつながりや空間があることで、居住者に生活における安心感、豊かさを与えていることが推測される。

c.空間のみを共有する交流

松陰コモンズのダイニング・座敷、早稲田ルームシェア、社員寮の食堂では、生活が集中し、他人と空間を共有しているが、干渉し合わずに個人の生活を営むという例がみられた。このように、空間を共有し、他の居住者の存在のみを感じる関わり方もひとつの居住者同士の関わり方として挙げられる。これらに関して居住者の評価としては「自分の生活を守りつつも独りでないという安心感が持てる。」「食事をするときは、たとえ他人であっても誰かがそばに居たほうが良い。」等が挙げられ、このような関わり方も必要とされている事が分かった。

d.気配を感じあう交流

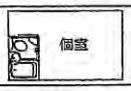
音や光のみで他の居住者の存在を気配のみで感じ、安心感を得ているという例も多くみられた。社員寮・木賃アパートでは、廊下のドアの開け閉めの音について、何も物音がしないよりはひとりではないという感覚が得られて良いと評価され、ミングルの事例では、個室の窓から漏れる光によりルームメイトの存在を感じ、安心感を得ているという例もみられた。また、松陰コモンズでは、共用空間から聞こえる音楽、料理の音について心地良いという意見もみられた。このように、閉ざされた個室での生活よりも、他の音や気配が適度に感じられる生活においては良い評価も得られた。

生活の共有形態を形付ける要素として考えられる事項

前項で浮かび上がった生活共有の中での人との多様な関わりは、主に共用形態や空間的構成により異なっていることがこれまでの調査から推測される。また、事例の比較考察からは、居住者同士の共用意識、共用空間の使用を左右する要素として幾つかの空間的要素が浮かび上がってきた。先の分類では、共用形態を形付ける要素として、個室機能による違いと共用空間での＋α空間集い空間の存在を挙げ予測したが、さらに掘り下げてみると、共用空間の質により居住者の生活の共有形態や生活状況、居住者の評価が異なっていることが推測された。そこで、これらの居住者の生活を左右している共用空間の主要な要素を更に細かく挙げ、生活の共有にどの様な空間的な可能性があるのかを考察する。

① 個室

・個室レベルB
個室に洗面・浴室・トイレを備えるタイプ



個室内に一部の設備を備えている例で、本調査では事例の社員寮がこれにあたる。個室の中に生活に必要な機能が備えられているということで、共用空間を使用する頻度も少ない。水周りの設備が個室にあることにより、ポットや冷蔵庫、食器が個室内に持ち込まれ、飲む行為・食べる行為が個室に持ち込まれることが多くなる。また、個室内でほとんどの生活をまかなえるため、個室内に友人を招きいれ、共に飲んだり、テレビを見たりという交流が多く起こっているのが特徴的である。第三者を招きいれても特に共用空間を使用しなくても良いため、他の住民に気を遣わなくて済むという利点が挙げられている。

・個室レベルC
個室に洗面・浴室・トイレ・キッチンのどれも備えないタイプ

個室という囲まれた空間のみが存在し、機能は全て共用空間に存在する例で、本調査では木賃共同アパート、ミングル、松陰コモンズがこれにあたる。これらの事例では生活の共用形態に事例により大きな差があるのがおきな特徴となっている。これは、共用空間に存在する機能のあり方、共用空間の形態によるものであると推測される。

また、個室に設備を備えないこのような例では、大部分の人はこの現状に満足をしているものの、アンケート結果からは、洗面台だけは個室に欲しいと答えた回答がみられた。

・個室レベルD
個室のないタイプ

個室がない例では、早稲田ルームシェアの調査を行ったが、この事例の場合は、個室がなくても、布団を中心に個人の生活領域の意識が生まれていること、常に皆が同じ空間で生活しているにもかかわらず、お互いの干渉が限定されていることが特徴として挙げられる。個室のない

生活では、お互いのプライバシーが守られなかったり、ひとりになれなく、個人の時間がなくなるという懸念があるがこの事例の調査によって、常に同じ空間にいるからこそその存在が自然となり、各々が無理な干渉をせずに個人の生活を営むという生活共有の可能性がみられた。

② 共用空間

a. 共用空間の質

・共用する居住人数

共用の生活形態をかたち付ける要因として、共用の規模が挙げられる。共用形態が同じであっても、共に住まう人の人数によって居住者の意識や生活の共有頻度が異なってきている。共用する人数の多い事例では自然と共用空間に公共の意識が生まれ、緊張感が生まれている。そのため、共用空間を使用する頻度も少なくなり、共用空間で行われる行為も特定されている。共用規模の少ない事例では、共用空間は自分の生活の場という意識が大きくなっている。また、人数が少ないということもあり、共同生活意識が存在し、きまりや生活の管理で、居住者同士の交流が生まれている。

・共用空間の広さ

＋αとしての集い空間が無い場合はほとんど共用空間で行為を共有できないため、他の居住者との行為の共有はお互いのルームメイトの部屋を訪ねあうことにより成立し、常に選択的な交流となっている。また、共用空間が広い事例では、共用空間にある程度の広さがあるため、その距離が個人の空間を作り出し、空間を共にしているがお互いに干渉しあわないでいる生活が多くなっている。

居住者は、このような空間のみを共有して行為を干渉しない、気配をのみを感じる関係について、他の居住者がそばに居るという安心感や、ひとりでないと感じられる生活を良いものと評価している。

・共用空間の存在の仕方

機能ごとに分かれた部屋として存在している（食堂、ラウンジ、浴室）事例では、閉ざされた部屋で他の住民と行為が混ざり合うことが無く、自然と他の居住者との接点が少なくなっている。また、各部屋が広く、そこで他の居住者と同席する事がある例でも、それが食堂であった場合は他の居住者の存在が良いものと感じられるが、ランドリールームやラウンジであった場合、閉ざされた部屋での同席に緊張感が生まれ、なるべく早く席をはずしたいと感じるということが、ヒアリング調査からわかった。

これに対し、空間的つながりを持つ共用空間では、常に隣の空間の気配を感じられ、視線は通らなくても、常に人の気配を感じる。このような共用空間を持つ事例では、居住者同士の認知も深く、自然と会話が発生する交流となっている。このような空間に対する居住者の評価は、常に感じるこれらの気配を良いものとして捉え、共に住まう楽しみを感じているという意見が多かった。

b. 共用される機能

・洗濯機（ランドリー）

今回の調査では、洗濯機を共用で使用している例が多数みられたが、これに対し特に不満はなく、共用することで良い設備を享受できることが高く評価されていた。

・大浴場

各個室に浴室を備え、さらに共用空間に大浴場を備えている事例aの社員寮では、「気分によって自室の浴室と使い分ける」という意見があった。また、全体のアンケート結果からは、自室に浴室を備えた上で、共用空間に大浴場があると良いと答えた人が多く存在し（図17）、このような贅沢空間としての機能が求められている事がわかった。

・ダイニングテーブル

事例d.eでは、キッチンと共にダイニングテーブルを共用しているため、Factor2での共に行う行為が多く、自然と交流が生まれているのが特徴となっている。また、ダイニングテーブルが大きく、皆が集まれる空間であるとき、多目的な使用で居住者同士の関わり頻度が増え、偶発的な交流が発展している。

・テレビ

全体のアンケートでは、個室と共用空間の両方に備えられている機能としてテレビが一番多く挙げられていた。行為の場所でも、テレビを見る行為においては個室と共用空間をの両方を使い分けている例が多く、選択的な使用により、居住者同士の関わりを調節している。

・生活基本機能の共有

本調査では、社員寮の事例以外は浴室、トイレ、洗面を全て共有しているが、これらの基本的な生活機能の共有は、生活の共有形態を一番左右する要因であると思われる。これらの機能を共有している場合、管理人が存在しない例では、居住者の間で必然的に共同生活の意識が発生し、多くは掃除の分担や設備の管理において居住者と何らかの協定や認識が成されている。また、分担がはっきりしていない場合はひとりの居住者にその負担が偏ったりと、このような機能の共用をめぐって居住者たちの間に内面的なつながりが生じていることは明らかである。

c.＋α集い空間の存在

・＋α集い空間がない場合

共用空間に＋αの集い空間が無い場合、居住者の共用空間の利用は機能の利用のみとなり居住者同士の交流は薄くなっている。交流がある場合も、多くはたまにお互いの部屋を訪ね合うという選択的な交流となっており、基の基盤が無い場合は、全く交流が発生しないものと推測される。

・＋α集い空間がある場合

共用空間に＋αの集い空間がある場合は、居住者同士の何らかの交流が発生していた。この場合は、＋α空間の存在形態により、居住者の意識や交流にも相違がみられたため、各事例における特徴的な共用空間を取上げ、＋α空間の形態別に考察する。

・ラウンジの存在

全体のアンケート結果では、建物内にラウンジが欲しいという回答が多く得られた(図17)。友人を招くときに使用したい、居住者同士が知り合い、交流を深められることに期待している等がその理由であった。

事例aの社員寮には、共用機能の他に、ラウンジという名を持つ部屋が存在し、皆で集まって飲むときに使用されているが他の目的ではほとんど使用されていない。このようなラウンジとしての+α空間は、皆で集うという前提の目的があったときにのみ使用され、居住者同士に前提的なつながりがある場合にさらに交流を深めるための空間として有効的であると思われるが、一方で前提となる居住者同士のつながりや、交流のきっかけがない限り、利用されることがない空間であると言える。

・テレビ・図書コーナーの存在

事例aの社員寮には、テレビコーナーが存在し、1年に1～2回ほど主要なスポーツ試合の観戦というイベントがあるときに使用されるが、それ以外で普段使用している人はほとんど居ない。これは、居住規模が大きいこともあり、人が多く通るところに設けられている空間に自然と緊張感が生まれ、他の居住者への気遣いをもとに、使用を断念する傾向があるためであると思われる。

・ダイニング・リビングの存在

松陰コモンズ、早稲田ルームシェアの物件では、広いキッチンを中心とし、居住者が集まって食事が出来る程度のテーブルを持つダイニングキッチンと、そこからつながった居間的空間(ソファや椅子等佇み空間)が存在する。これらの空間には、多くの行為が集中したとき、自然と居住者同士の交流が生まれている。ひとつのテーブルで食事をしている人、勉強している人、本を読む人等あらゆる行為が混ざり合うことで、会話の幅が広がり、居住者同士の交流が深まる大きな要因となっている。

・多目的な座敷の存在

松陰コモンズに存在する広い座敷は、本・雑誌を読む行為、勉強・仕事、友人・親戚を招く行為に利用されている例がみられ、多様な行為に使用できる空間的余裕、余剰空間が居住者の豊かな生活を作り出していると思われる。特に、人を招く行為は、生活を共有する生活では他の居住者への気遣いから住居内で行われないという事例が多くあったが、この事例の場合友人や親戚が頻繁に招きいれられ、この座敷空間で過ごしている。また、この空間は居住者のパブリックスペースと分離されているため、居住者は気兼ねなく外部からの人を招き入れることが出来る。このような人を招き入れることの出来る空間は、アンケート結果でも、他の事例でも必要とされており、生活の共有時には考慮しなければならない空間であると思われる。またこの座敷は、外部のイベントや地域の集まりに使用されることも出来る。このように、外部の人が使用可能な空間の存在は、居住者に住居内に閉じこもる事がなく、常に地域や社会とのつながりを感じることが出来ると評価されている。

d. 空間的の構成

動線に共用機能が連なるタイプ

事例aの社員寮にみられるような、個室の連なる廊下から延長した廊下に、共用の機能が部屋となって連なっている形態では共用空間や個室の入り口となるドアの並ぶ細い廊下が、居住者に緊張感を与えている。また、共用機能がひとつの部屋として存在し、内部の様子は覗えない。そのため、居住者同士、出会うことも少なくなると同時に緊張感が生まれ、共用空間への滞在時間も少なくなっている。

共用機能への動線と外部の動線が交わらないタイプ

木賃アパートの事例にも見られるように、共用空間の使用時にも、外出時にもめったに他の住民との動線が交わらない場合、全く他の住民を意識することなく、個室で個人の生活を営むこととなり、設備は共有しているものの、一人暮らしに近い感覚の生活となっている。

外部への動線が共用機能・空間を貫くタイプ

個室と共用空間が隣接し、外部への動線が共用空間を貫く形をとるミングルと松陰コモンズの事例では、個室と共用空間の両者の気配が伝わりやすく、他の居住者の存在を密に感じやすくなっている。また、住民の集いと動線が交差することによって、居住者同士の偶発的な交流が多く発生している。共用空間の気配を感じ、足を運んだり、気配により安心感を感じたりと、他の居住者との交流が発生しやすい要素となっている。

4-2 生活共有の可能性

今回の調査においては、単身者が一人暮らしに不安や寂しさを感じ、生活の中で人との関わりを求めていること、現在の住居からさらに心地良い共有形態、人間関係の構築への空間的な新しい可能性を感じていることがよみとれ生活を共有する中で人との新しい関係性を見出している事例を数多く見出すことが出来た。また、人との関わりにも多様な形があり、これらには空間的な要因の関与が認められた。居住者の空間的な要求は、居住者同士の関係性への可能性意識に結びつき、空間の共有は多様な人間関係を作り出す生活共有の装置として作用している。

4-3 まとめ

一人暮らしという孤独な生活の中で人や地域、社会とつながり、さらには独りでは持ち得ない機能の享受が求められている現状がある中、このような生活共有というかたちでこれらが実現されている実状に、単身者のひとつの居住スタイルとしての生活共有という住まい方に可能性を見出すことができる。このような現状の中で、本調査で明らかとなった生活共有の実態からは、単身者の生活共有としての住居のあり方が想定され、生活における人、地域との関わり、共有による享受を空間的操作により作り出していくことが期待される。